

駿建

2013 Oct. Vol.41 No.3

日本大学理工学部建築学科

日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College

[SPECIAL FEATURE]

本 を讀もう

- 大学の先生たちがオススメしたい31冊の本 -

Special Feature

本 を読む

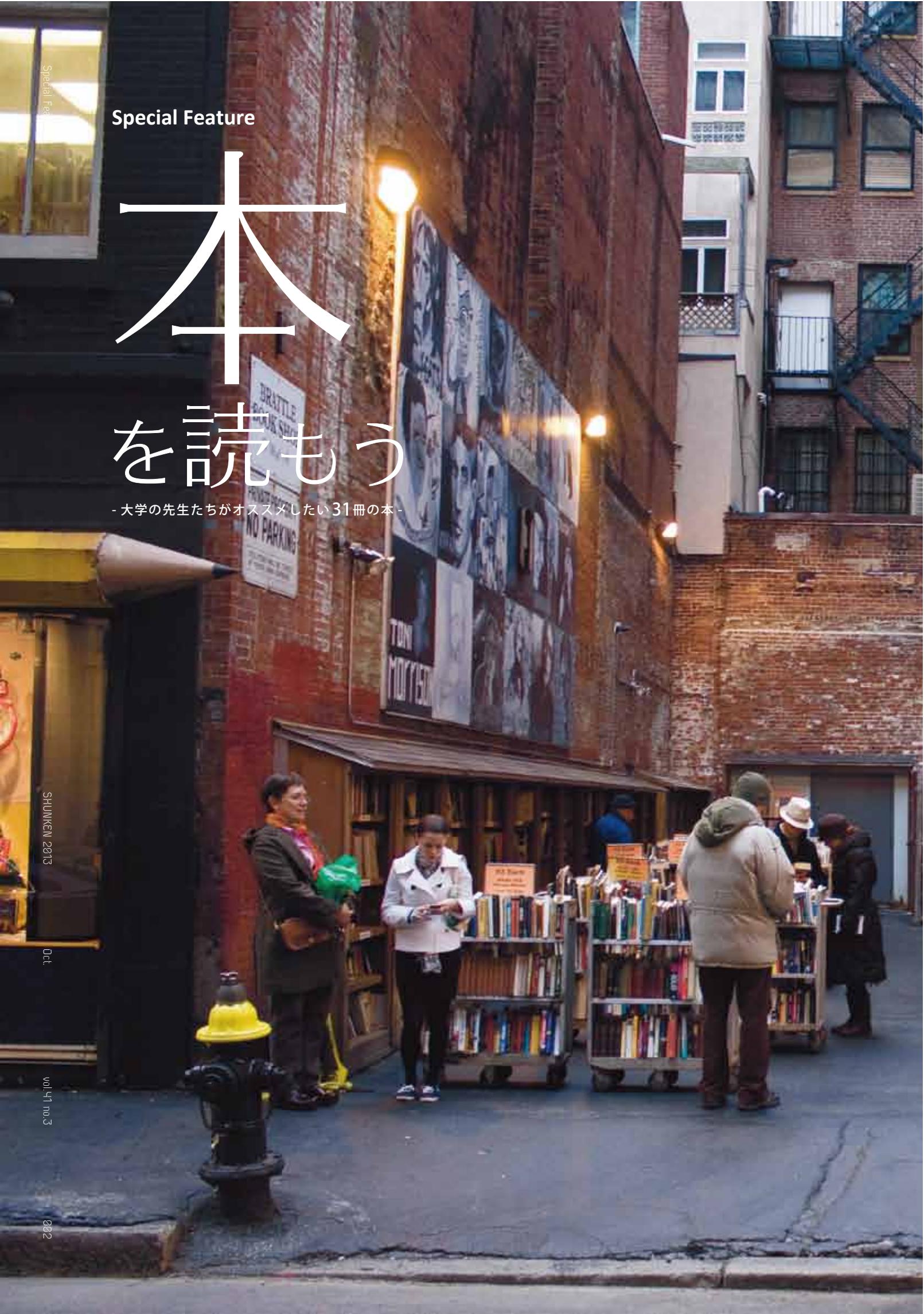
- 大学の先生たちがオススメしたい31冊の本 -

SHUNKEN 2013

Oct.

vol.41 no.3

202



今回の特集は「本」。理工、短大それぞれの常勤、非常勤のさまざまな先生方から、とにかくオススメの「本」について聞いてみました。建築本はもちろん、マンガから小説まで31冊の「本」を紹介します。

人類の多くが文字を読み書きするようになったのは、有史以来この 500～600 年に過ぎませn。しかし、Google の調査によると、「本」の数は 1 億 2886 万 4880 冊を数えるのだとか。Google では今、世界中の全ての「本」の索引をつくるプロジェクトが進行中なのだそうです。

今、こうしている間にも、世に誕生し続けている「本」。何故人は、「本」に魅了されるのでしょうか。「本」は何を私たちに与えてくれるのでしょうか？ 近年、若い人たちは、あまり「本」を読まなくなったと言われています。現代は、「本」だけではない情報メディアで溢れているのですから無理ありません。一方で、ただそれはきっかけがないだけでは、とも考えられます。

一冊一冊の先生たちによる「本」の紹介文を読んでいると、どうやら「本」には、私たちが知らない世界へ連れて行ってくれる「本」ならではのチカラがあるようです。そして、それはあなたの未来を、とても面白いものにしてくれそうです。だから、何か気持ちにフックした「本」があれば、一冊でも手に取ってみて下さい。きっとあなたの人生が、また少し面白い方向に動きはじめるはずです。

P2.3 の写真は、アメリカ・ボストンにある老舗古本屋「Brattle Book Shop」。写真の左に見える建物が本店で、周囲の建物に囲まれた本店脇の空き地も本屋のスペースとなっている。(Photo= bill comstock)

大学の先生が 建築1年生に オススメしたい本

10



美しい照明から、不気味な照明まで
照明をレシピのように紹介。

1 「Delicious Lighting」

(著:東海林弘靖/TOTO出版/2007)

料理人ピエールが紹介する光のレシピ集。美味しい照明もあれば、不味く味気ない照明もあるわけで……。美味しいものを食べないと美味しい料理は創れない。照明も同じこと。この本の面白いところは、レシピ集なので、良いと思う照明があれば、自分で試せること。理屈は置いておいて、とにかく感じることから始めてほしい。

駿

加藤未佳(理工学部非常勤講師)

何に興味があるかなんて、まだ分からなくなっているんです。

その代わりに色んな世界を覗いてみよう。

きっとその先に、あなたにとっての楽しい世界が待っているはずです。

2 生誕100周年の今だからこそ、 磯崎新が読み解く知られざる丹下健三。

「芸術新潮2013年8月号」

(新潮社/2013)

東京オリンピックの前年に生まれ、大阪万博のとき小学2年生だった僕にとって、「丹下健三」は聞いたことがある名前でした。高校生の頃は書店で美術雑誌などを手にとるようになり、「磯崎新」もまた、その字面が頭の片隅にありました。大学1年生のとき、それぞれが日本の現代建築を世界の水準に高めた巨人で師弟関係であることがわかり、二人が繋がりました。その頃、建築の世界は、近代建築を画一的なものとして反省、批判するポストモダンが隆盛でした。弟子の磯崎さんがその動向の世界的リーダーの一人として多様な手法を言葉とともに繰り出すスーパースターであるのに対し、師匠の丹下さんは中東産油国の都市計画などを手掛ける建築の第一線からは離脱した過去の巨匠というのが当時の僕の印象でしたが、大学卒業後に関わることになった磯崎さんの発想に、丹下さんの偉大な「過去」が批評的に現れるのを度々目の当たりにすることになりました。そのような場所で感じた奇跡の「師弟関係」、とりわけ磯崎さんの丹下さんにたいする愛情が伝わる一冊です。

駿

福山博之(理工学部非常勤講師)



3 建築家なしの建築が、 私たちを魅了するワケ。

「驚異の工匠たち
知られざる建築の博物誌」

(著:バーナード・ルドルフスキー/訳:渡辺武信/鹿島出版会/1981)

ヴァナキュラー建築という概念を系統的に分析し、世に知らしめた大著である。私がお薦めしたい点はそんな「ヴァナキュラー」などというカタカナ語などどうでも良く、とにかくこの本にある美しい図版と文章を見て欲しいのである。建築家なしの建築はかくも美しく人を魅了する。「行ってみたい。見てみたい。」と思わせる力がある。現代建築にこれに匹敵するパワーがどれほどあるだろうか。私は町歩きを趣味にしているが、ときどき思いがけず訪れた街角の「建築家なしの建築=素人建築」を発見して思わず立ち止まってしまうほどの魅力を感じることもある。本書にある建築は防御、本能、快楽、機能といった人間の営みに必要な原始的欲求に突き動かされた結果としての形であり、必ずしも意匠性が最大の目的ではない。法律や経済に制御された現代社会の中にあって、たとえばさやかであってもこの魔術的とも言える魅力を再解釈して表現することができれば……と日々思わせる一冊である。

駿

吉田明弘(理工学部非常勤講師)



4 建築家・内藤廣氏の講義録 美しいデザインを支える構造の世界。

「構造デザイン講義」

(著:内藤廣/王国社/2008)



著名な建築家であり、東京大学の社会基盤学専攻で教授を務められた内藤廣氏による「構造デザイン」の講義をまとめた講義録です。内藤氏は、代表作の1つである海の博物館において大スパン架構を実現するために、展示棟では集成材による木造架構を、収蔵庫ではPCaPC工法を採用するなど、構造に対する意識の高い建築家という印象です。本書では、内藤氏が建築家として「構造」と真摯に向き合いながら「デザイン」について学生に語っており、その内容には一読の価値があります。特に「美しさの中に構造を発見し力学で再構築する」という内藤氏の言葉は印象的であり、デザインと構造の関係の本質を言い表していると感じます。1年生にとっては、各種構造形式ごとに著名な建築家の作品が紹介されており、それらの構造的な特徴とデザインとの関わりについて知ることができるので、建築に対する視野を広げるきっかけとなる良書であると思います。

監

田嶋和樹（理工学部助教）

5 建築写真もいいけれど 時には図面だけをじっくり見てみよう。

「篠原一男住宅図面」

(編:篠原一男住宅図面編集委員会/彰国社/2007)



建築の本には大抵写真がついています。建築の意味は目に見える空間そのものにあると考えられているからですね。でもこの本には写真がありません、図面のみです。でも図面だけを眺めていると、不思議と写真では知り得なかった建築家の意図が汲み取れる気がします。写真では目に見えるが故に情報量過剰で霧掛かって見えることも、図面では純化されクリアに理解できることがあります。1年生諸君もカラフルな建築写真の載った本ばかり手に取るのではなく、たまにはこのような本を眺めて建築の意味を読み取る訓練をしてみてもいいでしょうか。また、篠原は「発表行為と設計活動は等価である」として、発表図面の作成に設計行為と同等のエネルギーを使っていました。それは図面だけで、実際の建築物とは別に建築の世界を建ち上げうることを知っていたからでしょう。そんな図面の持つ力も知ることのできる本です。

監

塚田修大（理工学部非常勤講師）

6 まずは色々測ってみる！ そこから見えてくる建築と人体の関係。

「見る、測る建築」

(著:遠藤勝勸/TOTO出版/2000)

著者は菊竹清訓建築設計事務所の元副所長。勝勸先生（今でもこのように呼ばせていただいている）には学生の頃にワークショップで出会ったが、すごい方だと知らず馴れ馴れしく話し掛ける学生たちを相手に、建築と人体寸法の関係性を丁寧に教えてくれた。その勝勸先生がインタビュー形式で建築について話された内容と共に、自身が旅する先々で体験した建築や空間のスケッチが数多く掲載されている。このスケッチたちが何度見てもワクワクさせ、建築の奥深さを物語っている。出歩くときには必ずコンベックスを持ち歩き、気になる箇所があればすぐに実測することで建築と人体寸法との関係性を知ることができる。その大切さを教えてくれる1冊。これからたくさんの建築を見学し、学んでいくであろう1年生にぜひ読んでもらいたい本。

ちなみに、研究室に置いてある僕自身が保有する1冊には勝勸先生からのメッセージが書かれていて、その言葉がいま仕事として行っている地域活動の原動力にもなっている。

監

中田弾（理工学部助手）



7 世界の民家に見るいろんな形。 その建築の形には必ず理由がある。

「絵典 世界の建築に学ぶ知恵と工夫」

(著:ジョン・S・テイラー/訳:後藤久/彰国社/1989)

世界各地の民家の形をスケッチでまとめた本。それぞれの地域の気候風土に対して建築が人間の生活をどのように守っているのか、また、人間の生活の欲求からどのような建築の形がつけられたのか、など、たくさんのスケッチで表現されている。部分的なスケッチと簡単な断面図などを組み合わせて、その建築を的確に説明しているので、エスキスをする時のスケッチのいい見本になると思います。現代は材料や技術が発達して建築の形が自由になった感じがしますが、この本を読むと様々な建築の形には必ず理由があることがわかります。

監

河内一泰（理工学部非常勤講師）



8 そもそも「建築」って何？ 分かりやすい言葉の解説書。

「建築を愛する人の十二章」

(著:香山壽夫/左右社/2010)



放送大学における講義、「建築意匠論」をベースに書き下ろされたものです。建築とは何か、という大きな問いに対する真摯な姿勢に貫かれていながらも、建築を志す人だけでなく広く一般の人に向けて、建築

の魅力と建築を作る喜びが、わかりやすい言葉を選んで表されています。建築に関わる人に対しては、作る勇気を与えてくれると同時に、長期的で広い視座に立つことの重要性を説く内容になっています。

各章は、建築の各側面および要素に対応していて、建築を設計する上で、常に立ち戻って参照もできると思います。より深く知りたい人には、専門的で豊富な事例と引用のある『建築意匠講義』(東京大学出版会)もおすすめです。豊富な経験と実践に裏打ちされた明快なテキストは、とすると、一つの答えに収斂してゆくように感じられるかもしれませんが、建築とは何かという問いは、読者に向けて開かれていて、常に再考されるべきものとして位置付けられているのだと思います。

監

伊藤博之(理工学部非常勤講師)

9 建築はそれ単体では存在できない。 周辺との関係から考えるってどういうこと？

「街並みの美学」

(著:芦原義信/岩波書店/2001/初版1979)



まず入学したら読んでほしい本のひとつに建築家、芦原義信による『街並みの美学』が挙げられるだろう。建築はそれ単体では存在できず、その土地の周辺地域との関係など都市的な視点から設計を考えなければならない。本書では、建築物が集まってつくられる街の景観に対して、西欧と日本を比較、考察しながら、評価の指標が提示されている。どのような街並みが良い街並みなのか、という問いに対して自分なりの考えを示したい学生にはお勧めである。また、内部と外部、床と壁、街路の構成など、建築を都市と連続して考えるうえで必要になる具体的なヒントがたくさんある。豊富な事例、図版と分かりやすい文体でかかれた本書は、都市への眼差しをトレーニングする上で、入門書としてふさわしい一冊である。続編として書かれた『続・街並みの美学』も併せて一読することをお勧めする。

監

古澤大輔(理工学部助教)

10 あなたも建築家・吉村順三の 名作を訪ねてみませんか？

「小さな森の家 軽井沢山荘物語」

(著:吉村順三/建築資料研究社/1996)



この本は、建築家 吉村順三の名作といわれている自身の別荘「軽井沢の山荘」を本人の語りとり別荘をとりまく四季おりおりの写真で構成した、絵本サイズの美しい本です。建築家本人によって描かれた図面やスケッチや写真からもこの建物の魅力は十分感じられると思いますが、何よりも読んでいる自分がこの家に招かれたような幸せな気持ちにさせられる本です。吉村順三は、少年のころから住宅建築に興味を持ち、日本の自然と風土によって造られた民家などに魅力を覚え、旅をしながらこれらを自分の体の中に取り入れてきました。そして人の幸せとヒューマンな建築を一貫して追求してきた建築家です。以前若い人の前でこれからの建築は？とたずねられた時に、「簡素でありながら美しいもの、自分たちの住んでいる風土と文化によって培われてきた様々な建築から学び、日本人としての気持ちから出たものを造るべきでしょう」と言ったそうです。

この山荘を代表として、吉村順三の一連の住宅には家族や自然から学んだ様々なものを感じます。初めて手にとるこの一冊は、何十年たっても本棚に残る本になるかもしれません。

監

大沢悟郎(短大非常勤講師)

1 どんなワクワクがあるのだろう？ LED照明の挑戦事例集。

「光を彩る、色が輝く LEDと創造力が会ったとき」

(日経BP社/2010)

大学の先生が 大学院生にオ ススメしたい 本



震災以降、LED は省エネ性が注目され、日本では他の先進国より速い速度で普及したが、本来のLEDは表現力豊かで新たな光や色の可能性を秘めたものである。建築だけにとらわれず、様々なアーティストのLEDへの挑戦を、広い視点で紹介している本である。3年前に発売された本ゆえ、その構成は省エネルギーに特化せず、本当に自由な表現に新たな照明の時代を迎えたのだとワクワクしたのを覚えている。震災直後など、自粛モードで建築を彩る照明など許されない空気があったが、機能を満たすだけの照明には無い心のゆとりや活力といった我々の心を明るくする要素がそこにはあるのではないかと。今一度、光の可能性を再認識し、想像力を働かせてほしい。

監

加藤未佳(理工学部非常勤講師)

建築の世界は、掘り下げれば掘り下げるほど、
面白い世界が次々と現れてくる分野です。

だからこそ、世界中の人たちは建築の世界に魅了され続けます。

3 如何に研究者は存在し、 未来を切り開く存在なのか。

「研究者」

(著:有馬朗人ほか/東京図書/2000)



2 オリンピックと「建築・都市」を考える。 幻の1940年大会、そして2020年！

「オリンピック・シティ東京 1940・1964」

(著:片木篤/河出書房新社/2010)



2020年にオリンピック・パラリンピック競技大会が東京で開催されることが決まりました。建築業界でも新たな風が吹き込まれようとしています。オリンピックが開催される頃には皆さんが社会で活躍される時代がきていることでしょう。

オリンピックに関連する本はたくさんあると思いますが、今回紹介する本では、幻に終わった第12回(1940年)、また皆さんもご存じの第18回(1964年)の2つの東京オリンピックについて、都市・建築の視点から論じられています。この本の一部を紹介すると、「選手村は、開催国での当時の集合住宅の考え方を端的に示すもの」とあり、第12回の選手村のいくつかの案や、第18回の代々木選手村になるまでの経緯や選手村の概要などが論じられています。2020年の選手村はベイエリアの予定です。日本の最先端技術で世界のトップアスリート達が快適に過ごせる選手村となるでしょう。新しい建築の時代を生きていく皆さんに、新しい発見があるかもしれません。

監

富田隆太(理工学部助教)

私は大学院生の頃、「建築」に関する本はあまり読んでいませんでした。ひたすらコンクリート工学の専門書を読んでいました。大学院生にとって、悩みなから専門書を深く理解していく時間は重要です。ぜひ自身の研究に関連する専門書を読んでください。

ただ、それでは身も蓋もないので、大学院生に読んで欲しい本を紹介します。本書はタイトル通り、「研究者」について書かれた本です。様々な分野の第一線の研究者が、自身の体験に基づいて成功する研究者の条件や方法を示しています。内容は強烈で、当時大学院生だった私はノックアウトされましたが、同時に気持ちが高揚した記憶があります。その証拠に、続編の「研究力」という本の存在を知った瞬間、書店に走っていました。大学院生は研究者でもあります。この間に研究の厳しさと魅力を知ってください。そして、自分が取り組んでいる研究が、将来、世界を変える可能性があることを知って欲しいと思います。

監

田嶋和樹(理工学部助教)

4 日本の皇居と西欧の広場の違い？ 比較相対化からも学ぶところは多々有り。

「表徴の帝国」

(著：ロラン・バルト/訳：宗左近/筑摩書房/1974)

フランスの哲学者、ロラン・バルトの有名な著書である。ジャンルとしては建築の本ではないが、建築の世界ではよく引用されるので、是非一読してほしいと思う。

日本の皇居と西欧の広場が持つ意味の考察はあまりにも有名である。西欧文化が意味と記号との間に強い結び付きを求めるのに対して、日本は意味不在の記号によって形づくられる文化だということを、食文化や娯楽文化の考察を通じて明らかにしていく過程は、とてもスリリングで今読み返してみても面白い。

西欧的なものと日本的なものを比較する構図は、学部1年生にお勧めした「街並みの美学」と似ているが、前者がフィジカルなのに対して後者はメタフィジカルであり、比較対象を徹底的に相対化している。この相対化という作業は抽象的な思考をする上で非常に大事である。大学院生になれば、建築を構想する際に抽象的な議論に接する機会も増えてくるだろう。自分の建築論に厚みをつけたい学生には是非手に取ってほしいと思う。

古澤大輔（理工学部助教）

5 建築家が設計する「家」は「家」?? 本当の「家」の真実を描く。

「生きられた家」

(著：多木浩二/岩波書店/1976)

住み手にとっては、他者のまなざしから作られる、建築家の作る家ではなく、より一般的かつ世俗的な、現実を生きることを投射した、実際に「生きられた家」のもつ思想的な意義が、様々な切り口から考察されています。学生の頃に読んだ私にとっては、修士論文の対象として、いわゆる名建築の論考ではなく、近代化に伴って増改築された無名の長屋を調査することを選ぶ、きっかけの一つになりました。

この本によって開かれた、肥沃な「生きられた家」の地平は、建築家からは、ある種の理想郷のように、共感と同時に戸惑いをもって受け止められました。なぜなら、この本は社会を記述する試みであり、そこにいかに建築家に関わるかという創作の道筋は、明示されていないからです。したがって建築の本として挙げることは、著者の意に反するかもしれません。

現在品切れ重版未定であり、決して読みやすくないこの本を挙げたのは、建築家が棚上げにしてきた問題が、今でも十分に今日的であり、是非学生の皆さんにも考えてもらいたいと思ったからです。

伊藤博之（理工学部非常勤講師）

6 実際のところ人は環境や空間を どのように認識しているのだろう？

「環境心理学 人間と環境の調和のために」

(著：羽生和紀/サイエンス社/2008)

自分自身が大学院生の頃、ある先生に「さまざまな人のために快適な空間を設計したいのであれば、心理学をしっかりと学びなさい」と教えられたことがあった。そして、心理学の参考書をいくつか読んでみたが、当時はなかなか理解できる（分かりやすい）文献がなく、途方にくれた記憶がある。

その後、早稲田大学人間科学部の教育コーチとして「環境デザイン論」や「環境心理学」を担当している頃に出会ったのがこの本。心理学を扱う書籍の中では文章も読みやすく、短時間で読める。内容も環境評価から対人環境、住環境、教育環境など、さまざまな視点で幅広く書かれていて、私たちの身の回りにある空間と人の心理との関係を知るきっかけとしてはオススメの1冊。この本に書かれている内容を理解したうえで学生自身が設計した作品を振り返ってみてもらうと、また新たな発見があるかもしれない。

中田弾（理工学部助手）

7 人にとってベストな寸法ってどれ？ 感覚と建築計画を橋渡し。

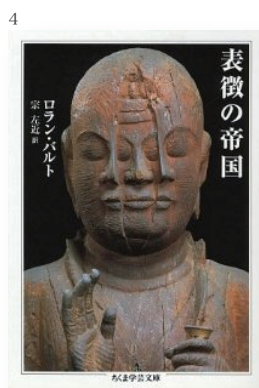
「建築計画の基礎」

(著：西出和彦/数理工学社/2009)

タイトルの通り、建築計画の基礎になる教科書のような本で、建築と人間の感覚の関係について、統計や数値を交えて具体的にまとめている本です。面白かったトピックは「マジカルナンバー7」について。虹が7色だったり、音階がドレミファソラシの7段階だったり、連続したものを区別できる程度が7段階程度になるとのこと。10÷7がおおよそ1.4になるように、1.4倍違うと区別ができるようになるらしい。

建築に当てはめると、柱をどのくらい細くすれば、手摺と同じように見えるのか、6畳の部屋と4畳半の部屋は1.33倍だけ3畳になってしまうと別の部屋の感じになってしまうとか、いろいろと想像がふくらむ。設計をする中で何らかの感覚やイメージを具体的な形や寸法に落とし込まなくてはいけないという時の参考になるし、基礎の知識として最初に学ぶよりも、設計をある程度やった人が読んだほうがいろいろな読み方ができる本だと思います。

河内一泰（理工学部非常勤講師）



8 無名の建物たちにも 学ぶべきことが無数にある！

「建築家なしの建築」

(著：B・ルドフスキー/訳：渡辺武信/鹿島出版会/1976)

建築史家の語る建築史の正系からはずれた、風土的な、無名の、自然発生的な、土着的な、田園的な、など興味深い“建築”達を著者であるルドフスキーの目をもって集められた本です。私も学生のころ、授業、教科書で学んだ建築たちばかり気をとめていた時代に、本屋さんでこの本の原書に出会いました。白黒写真の表紙をばらばらめくった時の興奮は忘れられません。授業の合間に映画館に通っていた時代で、特に興味を持っていたイタリアの映画監督のパゾリニの映画のロケ地が、この本に紹介されている多くの場所であったことにも驚かされ、自分もぜひこんな場所に一度は行ってみたいと思いました。現代の建築は構造や工法、そして環境技術など、ますます複雑化、グローバル化の時代になっています。学生さんが近い将来、リアルな建築と向き合うことになった時に、この本は建築とは何かを探すための、旅への案内書になることでしょう。

監訳

大沢悟郎（短大非常勤講師）

9 レム・コールハースが紐解く 都市マンハッタンの作られ方。

「錯乱のニューヨーク」

(著：レム・コールハース/訳：鈴木圭介/筑摩書房/1995)

オランダ人の建築家レム・コールハースが、19世紀後半から20世紀前半におけるニューヨーク・マンハッタンの誕生から発展の過程を、多くの貴重な図・写真を用いながら書いた本です。ただの都市史ではないマンハッタンの歴史が、クライスラービルやエンパイア・ステートビルをはじめとする高層建築物の計画・建設過程と関係する人々、そして各時代の経済的、社会的、文化的背景を絡ませながら緻密に書かれています。マンハッタン前史ともいえるコニーアイランドの遊園地に関する話や、多くの建築家が集まって計画されたロックフェラー・センター、ル・コルビュジエとマンハッタンの関係など、興味深い記述が多くあります。

少し分かりにくい表現もありますが、著者自身が序章で「私はマンハッタンのゴーストライターであった」と述べているように、マンハッタンと高層建築物の歴史を知る上では欠かせない本です。

監訳

長岡篤（理工学部助教）

10 街をつくる法規制の歴史を 知ることができる絶版良書。

「日本建築構造基準変遷史」

(著：大橋雄二/日本建築センター出版部/1997)

我が国の建築構造に関する技術的変遷を、市街地建築物法や建築基準法などの法令に定められた基準の移り変わりを軸に紐解いた本です。

大正時代に制定された市街地建築物法から、いまの形の建築基準法・新耐震設計法に至るまでには、幾度かの震災経験や研究の進歩、技術革新などを経ています。構造基準は、技術者を「規制」するものだと言われたりすることがありますが、著者の大橋雄二さんはそれを否定し、規制という形式によりながら、技術を普及し技術者を教育・啓蒙するものだと書いています。皆さんには、ルールに捕らわれるのではなく、その背後にある技術的背景を理解して仕事に臨むエンジニアとなって活躍してほしいと思います。

建築構造を扱った本ではありますが、設計・計画系の皆さんも知っていてほしい事柄（人物や歴史的出来事など）が多く登場しますので、ぜひ手にとってみてください。構造系の皆さんにおいては、自身の研究が我が国の建築構造技術発展の系譜の中でどのような位置にあるのか、ということに思いを馳せながら読んでいただくとおもしろいと思います。

残念ながらこの本は既に絶版とのことですが、駿河台の図書館に蔵書があります。また、私も一冊持っている（修士の学生時代、半貫先生からプレゼントしていただいたもの）ので借りに来てもらっても構いません。

監訳

石鍋雄一郎（理工学部助手）

11 建築を考え、伝えるには言葉が必要。 改めて言葉を学びかけに！

「言葉と建築 建築批評の史的地平と諸概念」

(著：土居義岳/建築技術/1997)

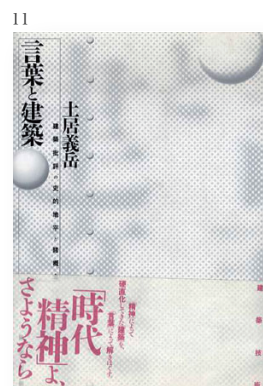
大学院でなにを学ぶのか。《言葉》を学んでほしいと思う。4年生までは、無我夢中で設計に明け暮れてしまう。卒業設計を終え一息ついたら、設計の腕だけでなく、建築を語る言葉を磨いてほしい。建築は今なお、《言葉》に多くを負っているからだ。

就職すると、育った環境やスキル、考えていることさえ異なる他者と仕事を一緒にしていかなければならない。そのとき、言葉を身につけているかどうかを試されることになる。この本は、近代建築史ないしは建築論の分野に属するが、建築家たちの作品やアイデアが、近代という時代の知の枠組みといかに深い関係にあるかが記されている。この関連のうちに、副題にある「批評」という営みが生まれてくるのだろう。建築家にとって、独創とはどういうことなのか。建築のかたちや空間の良し悪し、といった問題ではけっしてないことがよくわかるはずだ。

なお、同名の書がもうひとつある。翻訳書だが主旨は同じだ。上級者向けだが、『言葉と建築—語彙体系としてのモダニズム』（著：エイドリアン・フォーティ / 監訳：坂牛卓、邊見浩久 / 鹿島出版会 / 2006）もおすすめしたい。

監訳

田所辰之助（短大教授）





1 究極ダンディズムの先に見る ゴルゴと建築に通じるものとは!?

「ゴルゴ13」

(著: さいとうたかお/リイド社/1968-)

最近 170 巻を読みました。昔から愛読しています。そもそも漫画というのが、絵が中心で文字は吹出しの中に納めなくてはいけないので文字数が限られてしまうのですが、ゴルゴは一話分の情報量が多く、濃い。特に冒頭の 2、3 ページでストーリーの背景や登場人物の思惑など、最小限のコマで展開させているところにいつも感心しています。ゴルゴ本人は背景として存在し、あまりしゃべりません。毎回違う敷地とクライアントで仕事し、言葉ではない結果を残す。何か建築と通じるものがあると思いませんか。

■

河内一泰 (理工学部非常勤講師)

2 授業を聞きノートを見ていても覚えられない? 脳みその真相がここにある。

「脳には妙なクセがある」

(著: 池谷裕二/扶桑社/2012)

池谷裕二氏が綴る脳の最新研究を紹介した本シリーズの一冊。出ると毎回のようには読むのだが、最新作はまだ読んでいないので、その前の一冊を紹介する。専門的な話もあるが、日常に役に立つ情報も多く、目から鱗が落ちること必至。例えば、テスト勉強でノートを眺めたり、耳から聞くなど入力を繰り返しても記憶は強まらず、書く・話すなど出力をすることで記憶が強まることを脳の最新研究から教えてくれる。他にも、楽しいから笑顔になるのではなく、笑顔になった結果、脳が楽しいと認識することが紹介されており、楽しくなくても笑っていれば楽しくなってくるのだから、ぶすっと難しい顔してないで笑顔でいた方が自分にとって得だななんてことも。人間はつくづく不思議で、様々な偶然の進化を経て今に至るのだなと感じさせられる本。

■

加藤未佳 (理工学部非常勤講師)

大学の先生が
オススメした
い建築以外の
本

10



全ての世界とつながっている。だから、建築は面白い。

建築の勉強もほどほどに。時には、まったく異なる分野のものに触れることで、

新しい発想は生まれるもの。先生たちは、建築以外のどんな本に魅せられているのだろうか？

3 設計事務所での一夏を描いた小説。 モデルはあの建築家!?

「火山のふもとで」

(著: 松家仁之/新潮社/2012)

新聞の年末の書評でこの1年間での面白い本にあげられていたので手にとってみた本です。

夏になると事務所を軽井沢に移す老建築家が主宰する設計事務所での一夏を、主人公である若手建築家の「僕」を通して描かれている小説です。

架空の「国立現代図書館」の設計コンペとの闘い、僕と所長の姪とのひそやかな恋など、軽井沢の自然と事務所での先輩達との会話などからも幾層もの時間が流れて行きます。まず建築事務所での仕事の細かいディテール、また軽井沢の自然の描き方などがとてもリアルで美しい。建築界に詳しい読者には、この老建築家が実在の誰をモデルにしているのかを考えるだけでもとても興味ぶかい読み方ができると思います。作者の松家仁之さんは、建築家ではないようですが、デビュー作でこのように建築に携わっている読者でも、しっかり感動させるような場面や言葉を描けることに脱帽します。一気に読める面白い本なので、学生さんにもおすすめです。

談

大沢悟郎（短大非常勤講師）



4 スリリングで読みやすい科学の本。 建築にも通じる発見がそこにある!

「生物と無生物のあいだ」

(著: 福岡伸一/講談社/2007)

生物の本質を解明する分子生物学の急激な進歩が、研究者としての著者の若き日の体験と並行して描かれています。専門的な内容でありながら、優れて文学的な筆致によって、科学者の人間像や、同業者間の競い合いや確執をもスリリングに描いた、読み物として楽しめる内容になっています。

科学が世界を記述する方法であるとする、それをシフトするような新しい方法の発見は、建築のあり方にも少なからぬ示唆があるかもしれません。加えて、この本には、「秩序」、「動的平衡」、「内部

の内部は外部である」など、建築に関わる人間が素通りできない言葉が随所にちりばめられています。

世界を見る方法と、何かを追及する情熱的な態度に啓発される、科学者の著作には、芸術家の著作と同じくらい、多くの発見があります。読みやすい順に、同じ著者の近著や、『文明の中の科学』村上陽一郎、『銃・病原菌・鉄』ジャレド・ダイヤモンド、『部分と全体』W・ハイゼンベルク、『科学革命の構造』トーマス・クーンなども、同様にエキサイティングです。

談

伊藤博之（理工学部非常勤講師）

みんなはどこで本を読む?

古澤大輔先生オススの 本を読む場所ベスト5

1. 「くぐつ草」

吉祥寺にある喫茶店。建築家の鯨井勇さんが設計された落ち着いた空間。曲線のデザインが多用されているので面白いと思う。休日は混んでるので行くとしたら平日の昼間。

2. 「銀座ルノアール」

本を読むことが多い。週に3回くらい頻繁に行く。どことなく漂うイケてない感が逆に心地よい。だいたい駅の近くにあるので打合せの前後でちょっとした時間を使う時に便利。

3. 「デパートやホテルのエントランス、待ち合いスペース」

ちょっとした時間の使い方では、意外と使える。

4. 「公園をはしご!」

休日に自分の時間が出来たときは、近所の公園をハシゴしながらベンチで読書やメモをして過ごすことが多い。そこでのメモがプロジェクトの突破口を開いたりすることが幾度もあるので、たぶんリラックスしながら集中できるのだと思う。公園の中でも本を読むとき、アイデアを考えると、ぼーっとするときなど使い分けているかも。

5. 「歩きながら!」

歩きながら本を読むのも楽しい。本だけでなく、考え事や独り言をしながら早足で歩くと頭が活性化するのか、考えが整理されることがある。



5 芥川賞候補にもなった 3.11後の文学!?と話題の小説。 「想像ラジオ」

(著:いとうせいこう/河出書房新社/2013)



3.11後の文学とはなにか?世評高い『想像ラジオ』を読んだ。ひさしぶりに小説を読む気になったのは、この本が新聞の書評欄で「文学の自殺」として紹介されていたからだ。津波に流され高い杉の木のうえで仰向けになって横たわりつつけている男。かれは死者たちに向けラジオ放送をはじめ。かれの言葉は死者たちのあいだに瞬間にひろがり、大きな反響を得る。だが、残された生ある者にかれの放送は届かない。想像力をもつ、ごく一部の人たちをのぞいて……。なぜ、文学の自殺なのか。それは、ポスト 3.11 の文学が「あらかじめ正しいふるまい」として描かれるために、原理的に批判できないからだ、と新聞の評子は書いていた。「あらかじめ批判する自由のない作品のあり方は文学としての自殺ではないか」、と。では、ポスト 3.11 の建築はどうなのだろうか?そんなことも考えながら、読んだ。

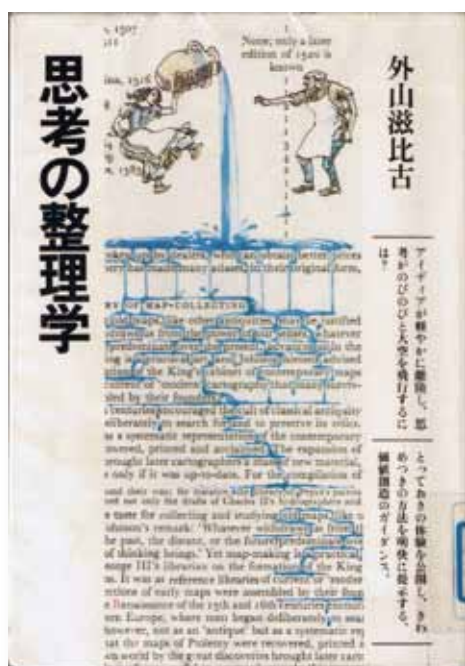
談

田所辰之助 (短大教授)

6 そもそも“ものを考える”とは どういうことなのでしょう?

「思考の整理学」

(著:外山滋比古/筑摩書房/1986)



考えるのはおもしろいと改めて思わせてくれる本です。30 年も前に執筆された本ですが、今の時代でもとても共感できます。有名な本なので、既に読まれた方もいるかもしれません。課題、研究、設計などを進めようと思っても、うまく自分の考えがまとまらない経験は誰にでもあると思います。この本は「ものを考えるとはどういうことか」を通して、いろいろな比喩や事例をあげて説明してくれます。なるほどと思える話がかなりあると思います。1話が6頁程度なので、少し空いた時間にもすらすらと読めます。全部で30 話程度ですが、特に興味深かった話は、「グライダー」(グライダー人間と飛行機人間?)、「朝飯前」(朝飯前のもの用法?)、「寝させる」(一晩寝て考える?)、「セレンディビティ」、「手帖とノート」の5話です。興味があれば、是非読んでみてください。

談

富田隆太 (理工学部助教)

大学の先生がオススメ

さまざまな職人が魅せる 究極の人間業!

「職人学」

(著:小関智弘/講談社/2003)

私は「職人」という言葉が好きです。ひとつの道を極めた人間に与えられる称号である「職人」は、私にとっての憧れでもあります。本書は、50 年余り町工場で旋盤職人として実際に働いてきた著者が、自身の体験や交流のあった職人達の体験を通じて、職人とはどのような人を指すのか教えてくれます。

本書に書かれている職人のエピソードは、どれも驚くべきものです。例えば、大学で保管していた多種の金属材料がごちゃ混ぜになってしまった際に、金属商の職人が金属を舐めて識別した話。あるいは、測定機器の仕上げ加工をする職人が、1万分の2ミリの精度では満足せず、1万分の1ミリを目指して達成し、さらに退職するまで精度向上に挑戦し続けたという話。これらの話は、人間の持つ能力の偉大さを教えてくれると共に、誰にでもその能力を獲得できる可能性を示してくれています。だから、この本を読むと、いつも前向きになれるのかもしれません。

談

田嶋和樹 (理工学部助教)



したい建築以外の本

10

9 磯崎新vs丹下健三
ひとつの建築コンペを巡る戦い。

「磯崎新の「都庁」戦後日本最大のコンペ」

(著：平松剛/文藝春秋/2008)

8 天才的文章に引き込まれる
新しいホラーの世界。

「ラヴクラフト全集 1～7」

(著：H.F.ラヴクラフト/訳：大西尹明/東京創元社/1974)

コズミックホラー界の巨匠ラヴクラフトの作品集である。SF 小説が好きでよく読んでいたが、ホラーに関してはこの作品群に出会うまで興味がなかった。一種のお化け屋敷的なわざとらしさを感じていたからである。

ラヴクラフトの描く世界は日常の中に潜む「宇宙的恐怖」であり、簡単に言うと、宇宙や別次元、もしくは太古に地中や深海に取り残された姿の定まらない「何者か」による、人類に対するおぞましくも予測不可能な干渉、を題材にしている。この世界観はその後影響を受けた作家達によって、リドリー・スコット監督の『エイリアン』やジョーン・カーペンター監督『遊星からの物体 X』などの SF ホラーブームにつながっていく。

このような異世界と日常を結びつける試みは通常「ファンタジー」に終わってしまうものだが、本書は作家による天才的な文章力と状況設定のうまさによって思わずその世界に引き込まれるのである。実際に読んでみてほしい。くだらないファンタジーなどではない事がすぐにわかるはずだ。

吉田明弘（理工学部非常勤講師）



少し強引ですが、建築の本であるけれど、「建築以外の本」としても紹介しようとして、この本はいかがでしょうか。

僕が学生になる前に東京都庁舎のコンペが行われました。この本はそのコンペの参加者、磯崎新にまつわる話をまとめた物語小説形式の本です。僕が学生の頃、建築界の巨匠と言えば磯崎新で、丹下健三はすでに歴史の人といった「感じ」がありました。丹下の都庁舎は既に完成していましたが、学生の僕にはあまり刺激にはなりません。一方、磯崎は建築作品、というよりは、多くの著作や一連の ANY 会議で刺激的な言説をし、建築論壇を取り仕切っている人、また数々の名作をコンペで選び出す名フィクサー、そんな「感じ」の人でした。でも僕のちょっと上の世代はもう少し違う「感じ」方をしていると思います。おそらく学生諸君はもっと異なるでしょう。同時代に生きているつもりが、既に違う時代にいるようでもあります。単なる歴史書を読

んだだけではその時代の詳細は解っても、その時代を「感じ」ることはできません。しかしこの本は、そんな時代を「感じ」ることのできる珍しい本です。日本の近現代建築史を勉強するのではなく、「感じ」たい学生におすすめの本です。もちろん建築以外の本として読んでも面白いですよ。

塚田修大（理工学部非常勤講師）



10 量子的な状態と計算不可能な
人間の意識との関係性までも検証！

「ペンローズの量子脳理論」

(著：ロジャー・ペンローズ/訳：竹内薫、茂木健一郎/徳間書店/1997)

イギリスの数理論理学者ペンローズが、人間の「意識」のメカニズムを、量子力学からひも解こうとする意欲的なテキスト及び解説である。アインシュタインの相対性理論は、すべての物質は相対化された関係にあることを、私たちに突きつけた物理学の決定的な理論であるが、ただ一つの例外、光の存在が絶対的な基準として理論の中心に据えられている。

一方、二つの世界が同時に存在し得る重ね合わせの世界、量子力学の世界では、神がつくった絶対的な存在である光さえも相対化してしまう。非計算論的に振舞う量子的な状態と、人間の意識という複雑で計算不可能な現象との関係性を、数学的アプローチから検証していくプロセスは、読んでいて興奮を覚えるだろう。

古澤大輔（理工学部助教）



今村雅樹先生が出版した
新しい本「パブリック空間の本」。
その背景には、今村先生の
学生時代の論文、
そして今村研究室の誕生にも
大きな関わりがありました。

連動トークイベント「オウケンカフェ」vol.5は、
11月27日（水）開催！（関連記事P20,21）



LAB
THE
WORLD

2

研究室を巡るインタビューシリーズ不定期連載

コミュニティやパブリックから設計デザインを学ぶ
設計意匠研究室

インタビュイー＝今村雅樹 教授

ボーダレスの時代に誕生した今村研究室。

— 今村先生が教職に就かれてどれくらい経ちますか。

もう 14 年が経ちました。数年前に研究室創設 10 周年のパーティーを卒業生たちがしてくれました。全部昨日のようなことに感じますね。

— 大学卒業後はどちらで働かれていたのですか。

僕は 1979 年に、この日本大学の大学院（修士課程前期）を出て、そのときは建築家の村野藤吾さんの設計事務所に行きたいと思っていました。大学では、この 5 号館を設計された宮川英二（1915-1989）さんの研究室に所属していたのですが、ちょうど OB で村野さんの事務所で働いている方がいらして。その人づてにラブレターを渡したなあ。ラブレターを書いて、宮川先生に添削してもらって。たぶん 2、3 回出したと記憶しています。ちょうど村野さんは、新高輪プリンスホテル（1982）の設計に取り組む前の頃で、事務所も火の車だったようですが、結局は来年まで待ってくれと言われてしまったのです。

それを待っている間に JIA のオープンデスクで、建築家の伊藤喜三郎（1914-1998）さんの事務所へ行ったら、そのまま来ないかと誘われて。働き始めたら、背負うプロジェクトも多くなっていて、約 8 年間勤務しました。その後、独立したわけです。1989 年でした。



— 独立してすぐ、大学の教職へ就かれたのですか。

いやいや。独立したころ僕はまだ 40 才前でした。当時、どの大学もそうでしたが、日大の先生たちも 40 才前の建築家なんて、建築家として認められないという風潮がありました。だから、僕はすぐに大学で教えることはできなかったの、別のインテリアスクールなどで教えていました。

40 才を過ぎて、JIA の新人賞などを受賞すると、やっと母校の日大にも非常勤で呼ばれるようになりました。非常勤講師の期間が約 10 年ほどあって、2000 年に常勤として教職に就きました。

— 非常勤から常勤へ。新しい研究室をいきなり持つことは大変ではなかったですか。

研究室をつくるといっても大学は何も教えてくれませんからね。それは大変ですよ。その 4 年前から高宮真介先生が、プロフェッサーアーキテクトとして研究室を持たれていて、王道の建築設計を研究室としてもテーマとしてさせていました。僕はそれをそばでずっと見ていたから、大学に就いて、さて自分の研究室はどうしようかと考えたわけです。研究室として、何を議論の対象とするかということが一番迷いました。

それまでは、あるビルディングタイプを対象に研究を行う研究室がほとんどだ



2006 年「韓国釜山グアンボック通り再生デザイン国際コンペ」で今村研究室の案がファイナルに選出され、プレゼンテーションを行うために研究室学生たちと共に韓国へ行った。このコンペは住民投票で決まるもので、住民相手に選挙演説のようなプレゼンテーションを行なった。結果は 2 等に終わった。上は、釜山の街中に掲示された今村研究室の提案作品。下は、プレゼンの後、勝ったと思って！？行った韓国の協力事務所と前祝いの会。

ったので、建築家としての僕が研究室を持つのであれば、住宅か？となるのだけど、住宅というものは、それだけを教えるということがとても難しい分野だと今でも思っています。当時は、レム・コールハースの影響などもあって、プログラムの話は随分とされていた時代で、家族やパブリック、プライベート、nLDK を打破しようなんてことが、随分と言われていました。もちろん住宅という世界をマイクロコスモスまで極めて教えていくこともできるけど、そういった時代を考えると、これからの学生にとって、それはどうなのかなと思ったのです。

一方で、2000 年代初頭は、まさにボーダレスの時代でもありました。例えば、建築とアートの境目だとか、プロとアマチュアの境目もなくなり始めていた。まさに世紀末的な再構築の時代のはじまりだったのです。それまでのように絵に描いた未来ではなく、『未来世紀ブラジル』（1985）や『ブレードランナー』（1982）の映画で描かれたような、リアルで起こりうる近未来を予感させる空気が時代にあった。これからはさまざまなジャンルがシャッフルしていくような世の中になるのだろう。だからこそ、研究室をはじめめるのであれば、きちんと社会と接するようなテーマを設けた方がよいと思ったのです。

学外へ出て行けば、社会と対峙できる体験が いろいろなことを教えてくれる。



左:「菜の花里美発見展」で出展した作品「風のコンビニ」。「大地の芸術祭」にて出展した作品「イエノシルシ」。共に研究室として取り組んだプロジェクト。

そこでふと、自分の修士論文のことを思い出しました。僕は住民参加についての修士論文を書いたのですが、その論文の延長上のことを素直にやろうと。つまり**コミュニティやパブリックということ**をテーマとして、**研究室で取り組むことにした**のです。

— 研究室の学生たちとは、具体的にどのような活動をされたのですか。

主にアート系のワークショップが中心でした。**とにかく研究室のみんなで頭で考えるだけではなく、身体を動かすことをはじめました。**今では**佐藤慎也**研究室が建築とアートの境目のような活動をしていたり、**山中新太郎**研究室などでもワークショップを行っているようですが、当時、設計意匠系の研究室でワークショップなどをやることはありませんでした。

タイミングとしても、とても恵まれていました。例えば、ドイツの**ドクメンタ**や各国での**ビエンナーレ**なども充実していた時代で、その余波が日本にも伝わってくると、アートの中に社会的可能性を見いだす風潮が見えてきた時でもありました。

直接的なきっかけは、「**大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ**」や「**瀬戸内国際芸術祭**」をディレクションしている**北川フラム**さんが、研究室を開いてすぐの頃に、「**菜の花里美発見展**」という千葉でのアートイベントを手伝って欲

しいと声をかけてくださったことでした。**アートイベントにアーティストではなく建築家が声をかけられるわけですから、こういったこと自体、当時が大きな転換期だったことを物語っています。**

これが一つの契機となって、以後アート系のプロジェクトをたくさん研究室として取り組むようになりました。研究室の学生が地元の住民たちと一緒に何かをつくる。いろんなことをやりましたね。

— 普段、設計課題をやっている学生たちが、そのようなワークショップの場ではどうでしたか。

建築の学生って何でもできるなあ。それが凄く驚きでした。**学外へ飛び出て、実社会の中のものづくりの現場に放り込むと、何も指導しなくても何かできる。**最初に取り組んだ「**菜の花里美発見展**」では、小学生とのワークショップが中心だったのですが、参加する小学生とその親御さんたちときちんと接しながら、ものづくりもできてしまうわけです。

今でこそ、「**大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ**」や「**瀬戸内国際芸術祭**」といったアートイベントは定着しつつありますが、まだその先も分からなかった時代に、そういった取り組みを通じて、学生たちもプロジェクトにチャレンジした。建築とアートの間で、実際にこの街がどうなっていくんだろうと考える。例えば、こういうイベントをやろう

とすると、必ず反対派も出てくるわけですが、そういうことも含めて**社会と対峙する体験が、教育的にも効果があるという**ことが、だんだんと確信へと変わっていきました。

— 普段、学内だけで学んでいると、学んでいる建築というものが、実は社会の中でさまざまな生かせるということを気付く機会がほとんどないのかもしれない。例えば設計を学びたいと研究室に入ってきた学生がいたとしても、そのような体験は、建築が持っている、しかしそれまでに見えない可能性に気付く手がかりを与えてくれそうですね。

そうですね。それまでは、設計意匠を学ぶのであれば、基本研究室の中で学ぶ。キャンパスから外には出ていなかったでしょう。そのころから先生たちは、学生たちを引き連れて外へ出はじめた。そういう時代のはじまりだったわけです。学生たちも、それぞれにいろんなことに気付いたのだと思います。その結果として、特に初期の研究室の学生たちは、建築設計だけではなく、アートやファッションなど、さまざまな分野へ進みました。

— 一方で今村研究室は、研究室としては意匠設計にカテゴライズされるわけですから、アート系に振れてしまうことへのジレンマはありませんでしたか。



2006年研究室ゼミ風景「地域開放型小学校の設計事例研究」の写真。この頃には、「アートから建築への実践」の展開にさしかかったところで、地域と建築のあり方の一つとして「地域開放型小学校事例（沢野中央小学校）」を学生たちと研究していた。

頭だけでなく、身体を動かすことをはじめてみました。

研究室は、自分を鍛え、自分の新しい可能性に気付く場所。

一時期は、アート系の依頼が次々と舞い込んできていたこともあって、いくつも断ってきました。もちろん先ほどお話ししたメリットもありますが、**その上で建築というものをしっかり総括しなくてはいけないという危機感もあった**わけです。それは当時、同じように建築系の研究室でありながら、アート系のプロジェクトに取り組んでいた他大のプロフェッサーアーキテクトたちも同じだったと思います。

先日、OB 会の桜建会主催ではじまったトークイベント「**オウケンカフェ**」の二回目に登場された**メジロスタジオ**のプレゼンにも登場した「都市居住ワークショップ（建築文化 2001 年 7 月号）」は、初期の今村研究室も関わっていました。このプロジェクトは、住宅そのものは、もはや住宅のみで完結するのではなく、コンビニをはじめとした都市に溢れるさまざまなモノで、補完されながら、新しく“家”の概念が形作られはじめているのではないかと、というプレゼンでした。要はアートのプロジェクトに取り組みつつも、**アートの位置づけがこれほど変わる**ろうとしているのだから、**建築も変わるのだという意識で、同時に建築のプロジェクトにも携わってきた**わけです。

— それまでの建築学科の意匠系研究室といえば、いわゆる計画学が中心でしたが、2000 年代のさまざまな社会の変動は、「これからの建築とは何か？」ということ、を、突きつけてきたわけですね。ちょうどその転換期に今村研究室が誕生したということが、よくわかりました。

「これからの建築」について、問われているのは、今なお変わらないと思っています。僕が大学で研究室を持てるのも、あと 5、6 年のこと。残りの時間は、また次の世代にバトンタッチしていくことも考えながら、研究室のことも建築学科としても良い方向に持っていかなければいけないと考えています。まさに中継ぎですね。

建築設計についても、まだまだ混沌と

した状況になっていくと僕は考えています。僕が若いころのように実施コンペも公共的な仕事も少なくなっている中で、今の若手の建築家たちのよりどころは、何だかんだ言って住宅です。個人の住宅や民間の集合住宅を設計しながら、何を言うか、発信していくかという時代になっています。

その中には、新しい材料やストラクチャー、空間といったもので勝負するモノ派もいれば、その対局には「住み開き」といったようなものや地域との関係性をも射程に捉えるコト派もいる。後者の方の発言は、この数年でもどんどん増えてきていますよね。**そこには必ず社会が要求しているという背景があります。それを読み取りつくることできる。やはりこれが建築の醍醐味だと思います。**

そして、今の社会がどうなっているのだろうと探るには、やはり研究室の活動がとても役にたつようです。最近、首都大学東京の小泉雅生さんと武蔵野美術大学の高橋晶子さんと共に『**パブリック空間の本 公共性をもった空間の今までとこれから**』という書籍をつくりました。これも 2 年ほどかけて学生たちと共に作り上げてきました。こういうこともただ作業を手伝うだけではなく、学生たちと対話を交わしながら、内容を考えていく部分もある。学生たちは、そこから得られることも大きかったと思います。

— 最後に、研究室が誕生して 14 年が経ちましたが、研究室の学生たちはどのように変わりましたか。学生たちへのメッセージも一緒にお願いします。

14 年前、研究室が誕生した当時の学生たちは、ほとんどがアトリエ系の設計

事務所に就職していきました。そうではない卒業生は、アート系に進んだり、中には自分でいきなり設計事務所をつくってしまう人もいました。

ところが、2007 年に高宮研究室がなくなった頃からでしょうか。卒業生のほとんどが組織設計事務所へ行くようになってしまいました。要は、**研究室に所属する理由が、まさに就職のためみたいになってしまった**。研究室に所属し、そこでやるプロジェクトを自分のポートフォリオに載せて、コンペで賞をもらってあげれば大手の設計事務所へ入ることができる。そんなレールに乗っかることを最初から見据えていたりするのです。

もちろん奨学金を返さなくてはいけない事情があったり、社会全体が将来への不安を持つ中で、確実なお給料を求めることは分かるのだけど、もう少し良い意味で気楽に夢を持ってくれたらな、とは今でも思っています。どの研究室もそうだと思いますが、**基本研究室という場所は、自分を鍛えて新しい自分の才能を見いだすところ**だと思うのです。だから、本当はそのことに一番気付いて欲しい。そこから社会に出ること、働くことを考えて欲しいですね。

だからこそ、僕は研究室の中で学生たちと接するときは、ざっくばらんに話すようにしています。**正解を与えるのではなく、うだうだと皆で話し、考える。**一見、非生産的、非効率的なやり方だと思いますが、**そういう時間をつくることで、学生たちに新しい自分の考えを見つけて欲しい。**いろんな考えがあることに触れて欲しいと考えています。そのようにして、残りの数年間も、学生たちと一緒に、社会とそして建築について考えていきたいですね。

駿



今村研究室は、毎年夏にゼミ旅行へ行く。今年は、出雲へ行った。写真は「大社文化プレイス」にて撮影。

有名建築のエッセンスを読み取り、 新たな実寸1/1をつくる

text= 末岡佐江子 助手

本 年も夏季集中「デザインワークショップ I」を、8月5日から10日まで実施した。参加者は、3年生15名、4年生2名、合計17名となった。共通テーマを「建築のエッセンス」とし、ユニットマスターに非常勤講師の石黒由紀、塚田修大、福山博之の各先生を迎え、科目担当の佐藤光彦先生を含めた4名の下で進められた。

有名建築のエッセンスを読解、翻案して、実寸（原則として人が入ることができる）の作品制作に取り組んだ。この課題では、①ある建築のエッセンス（設計意図、空間の魅力など）を読み解くことで、建築を理解する能力を養うこと、②実際に制作することで、空間をつくり上げる過程を体験すること、③自分たちでつくり上げた空間を評価することで、これからの設計にフィードバックしていくこと、を目標としている。原則として、実際の機能を持った空間とする。参照する建築の機能と同じである必要はない。条件としては、4～5日程度、4万円以内でその意図を実現することが可能な空間であること。設営場所は、駿河台校舎で常識的に設営可能な場所（5号館製図室・5号館横広場など）とし、プレゼンテーション時に内部に入ることを前提とした。

第1フェーズは、各自が案を作成し、初日に発表、4案を選定した。その後4ユニットに分かれ、選定された作品をもとに担当教員の指導の下で、さらに案を発展させ、原寸で製作した。班によっては、緊張感のある日が続いた様子もあったが、最終的には4班とも満足のいく様子が伺えた。

今年は助手の4名によって賞が選ばれた。 



佐藤ユニット | 作品名「Figur and Ground～透過面による図の表出～」

メンバー：3年生／高橋小百合、宇田百孝、橋本和弘、渡邊憲造

左：佐藤ユニットによるプレゼンテーション。 右：製図室内に作られた作品を先生方が中に入って体感中。



福山ユニット | 作品名「IREKO」

メンバー：3年生／小杉真一朗、敦賀谷俊、白木大一、三浦一太

左：福山ユニットによるプレゼンテーション。 右：製図室に模型を展示できるブースを制作した。



塚田ユニット | 作品名「TとSの間」

メンバー：4年生／飯名悠生、3年生／鎌田泰誠、川崎容楊、石井迪宇、石川卓実

塚田ユニットによるプレゼンテーション。5号館脇の広場につくられた。



石黒ユニット | 作品名「消えたBOX」

メンバー：4年生／森徹、3年生／ショウ家琪、安祥毅、賀詩音

塚田ユニットによるプレゼンテーション。5号館脇の樹木を囲うようにつくられた。

山から竹を切り出して、 みんなが座れる竹のベンチをつくる

text= 田所辰之助 短大教授

夏期に行なわれるものづくりワークショップの授業も6目を迎えた。キャンパスを飛び出て、自然のフィールドから学んでいきたい。手を動かし道具を操ることのなかから、ものをつくり出す喜び、醍醐味を体験したい。こうした主旨のもと、八王子にある大学セミナーハウスに宿泊して、2泊3日のワークショップを続けてきた。1年生を対象にした授業で今年度は9名が参加し、「みんなが座れる竹のベンチをつくらう!」という課題に取り組んだ。

デザインの条件は3つ、(1)二人以上が座れること、(2)〇(曲線)をなんらかのかたちでデザインに組み込むこと、(3)持ち運びできること。それぞれグループに分かれ、3脚の独創的なベンチができあがった。割り竹のアーチがもうひとつのアーチを支えるユニークな構造をもつ作品「アーチ×アーチ・チェア」、二人で座るとはじめて安定する揺りかごのようなベンチ「ゆりかごシーソーチェア」、丸竹をつなぎ自在にかたちを変えられる寝椅子「竹畑」、いずれもアイデアに溢れた作品となった。竹はセミナーハウス敷地内の竹林から、参加者自身が切り出し加工しなければならない。だが、のこぎりや鉋(なた)など使ったこともない。金

物は一切用いず、接合部はしゅろ縄を用いて手作業で堅結する。苦労しながらも、力を合わせて最後までつくり上げたことに、満足感もひとしおだった。

夕食後には特別講師を迎え、“夜話”を開催した。沖縄の名護市庁舎、今帰仁村中央公民館などの設計で知られる建築家丸山欣也先生(ATELIER MOBILE、NPO 法人有形デザイン機構)には、膨大な数の直筆のスケッチを見せていただきながら、建築への向き合い方についての印象深いお話をうかがい、建築を学び始めたばかりの1年生を鼓舞していただいた。技術面で毎年サポートしていただいている鈴木晋作さん(アトリエ・ぼむ)、美濃輪朋史さん(Landscape Design & Agriculture)からは、ラオス、チベット、パリでのワークショップの活動を紹介いただき、ひろく世界へ受講生の目を向けていただいた。

同じ釜のめしを食いながら、と言うが、キャンパスのなかではこのような体験はのぞみ得ない。みんなで意見を交換しながら、紙に描いたデッサンがしだいかたちになっていくプロセスとともに経験したことが、なによりの収穫だったのではないかなと思う。



「ゆりかごシーソーチェア」

メンバー：齊藤康嗣、鈴木健太郎、染谷翔也、高梨通奈
担当教員：田所辰之助



「アーチ×アーチ・チェア」

メンバー：石戸谷凌、新部瑠介、守屋徹基
担当教員：高安重一



会場の大学セミナーハウス本館（設計：吉阪隆正）。



グループごとのデザイン発表会（プレ・ワークショップ）。



作業風景、セミナーハウス内のユニットルーム。



丸山欣也先生を囲んでの“夜話”。



完成して喜びもひとしお。



最終講評会の様子。



三日間の苦労を乗り越えて、記念写真を。



「竹畑」

メンバー：齊藤延洋、中林悠
担当教員：山崎誠子、星和磨

News & Topics

1 | 毎月開催、在学生も卒業生も、誰でも参加できる

新しいレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」がはじまりました！

理工建築にとどまらず、日大建築系すべての卒業生による会「**日大桜門建築会**」、略して「**桜建会**」。その桜建会では、会員はもちろんのこと、後輩である現役学生たちへ向けて、さまざまな企画を展開しています。そのひとつとして、卒業生と学生のコミュニケーションの場所をつくり出すために、7月から「**オウケンカフェ**」というレクチャーシリーズをはじめました。毎月末に「オウケンカフェ」と名付けた場を開き、ゲストによるショートレクチャーの後に参加者で語り合う。従来の一方通行の硬いレクチャーではなく、多くの人が自由に発言できるような、柔らかな会を目指します。さまざまな形で「建築」に関わるバラエティ豊かなゲストを迎え、「建築」の拡がりや可能性を考えていきたいと思います。

今回は、これまでに行われた3回に参加した学生たちのレポートも合わせて紹介。次回は11月27日（水）、ゲストに**今村雅樹教授**、**小泉雅生さん**（首都大学東京教授）、**高橋晶子さん**（武蔵野美術大学教授）を迎えて行きます。みなさんも、ぜひ参加を！



vol.1 / 2013.07.31 WED.
ゲスト：大西正紀+田中元子 / mosaki

| **寺岡良祐**（建築学科4年 | 山中研究室）

建 築界への関わり方を考えさせられる会であった。mosakiの二人の建築界への関わり方は、従来には無かった、どちらかというプロデューサーや広告代理店が行っていた活動を、建築の専門家としての立場から、外観だけでない建築の面白さを掘って取り組んでいるように思われる。

ユニットの名前を広めるきっかけとなった「けんちく体操」は、その建築を身体で表そうという取り組みで、今まで建築家の口から語られていた「身体性」とは全く違

7月31日（水）に第1回目のオウケンカフェが行われました。ゲストのクリエイティブユニット「mosaki」の**田中元子さん**、**大西正紀さん**によるトークとともに、後半は「けんちくカクテル」（CCTV by Rem Koolhaas）が参加者に振る舞われました。

う。知識が必要な美術鑑賞的視点の建築体験ではなく、あくまで「体操」としてのおとしこみ方に、現代型の一般社会への溶け込み方を見ることができる。

mosakiが建築をディレクションする姿勢を象徴するのは、田中さんが口にした「見た人の建築 Switch を ON にする」というもので、キャッチーなビジュアルイズ、けんちく体操やけんちくカクテルのような日常へ建築要素を沁み出させるようなプログラム、雨のみちデザインのように、ともすれば雨仕舞いのディテールの込み入った話になりそうな話題を、一旦、建築の外にまで放り投げておいて、そこから建築の話に

戻す巧みさ。最後はカフェのようにテーブルを囲んで和やかに談笑しあったが、「新しい建築」を真剣に語らう素晴らしい会であった。

【映】



vol.2 / 2013.08.28 WED.
ゲスト：古澤大輔+馬場兼伸
+黒川泰孝 / メジロスタジオ

| **小笠舞穂**（建築学科4年 | 佐藤慎也研究室）

修 士2年のワークショップで出会った3人は、そのまま事務所を開き、今年で11年目。「他の建築家たちよりも小さいものをたくさん創ってきました」というように、レクチャー内でもたくさんの実作ができていく過程を披露してくださいました。同時に彼らが影響を受けてきた多くの思想や設計が、プレゼンの随所に引用されていたことがとても印象的でした。隈研吾、西田司、大江健三郎、西沢大良、横文彦、妹島和世、アレグザンダー。こんなにたく

8月28日（水）にオウケンカフェの第2回が行われました。メジロスタジオの**古澤大輔**助教、**馬場兼伸さん**、**黒川泰孝さん**の3人をゲストに迎え、結成から11年を振り返りました。

さんの人々の言葉を使ったレクチャーは、授業以外に今までに体験したことはなく、かといって授業とは少し違う、フランクに質問が飛び交う時間はとても気持ちのいいものでした。3人が言う「模倣的な装飾によって身近な建築を創っていく」ということが、そのまま現れたようなプレゼンだったとも言えると思います。

レクチャーはオウケンカフェという名の通り、前回同様、お酒を飲みながら先生・生徒関係なく建築を語り合う場となっており、とても刺激的でした。みなさんは是非1度訪れてみるべきお店だと思います！

【映】



News & Topics

vol.3 / 2013.09.25 WED.

ゲスト：中崎透

内野孝太（建築学専攻 M1 | 佐藤慎也研究室）

中崎さんの個人活動からユニット活動を写真と共に紹介してもらい、写っているものが「作品」から「人」に変わっていくのがとても印象的であり、興味深い。両者の活動に共通するものとして、場所を通して、人をどのように巻き込むのか、ということを意識しているように感じる。

個人では、オープンスペースとして、なんでもない「ただの家（場所）」にラベリングを行うことで、「たまり場」をつくっていく。それは日常生活の延長であり、ゆるくその場所に訪れることができる。そのゆるさが「たまり場」として機能しているのではないと思う。

また、ユニット活動では、「空っぽな現実に向かうプロセスを作品化」することで、プロセスそのものが作品となっているものである。「どまんなかセンター」では、半分廃墟であった洋裁学校を利用してプロジェクトを行い、今まで利用されていなかった場所を、プロジェクトに参加することを

9月 25 日（水）に第3回目のオウケンカフェが行われました。「あいちトリエンナーレ 2013」に Ndegata Instant Party（中崎透+山城大督+野田智子）として出品しているアーティスト、中崎透さんの活動が紹介された。

通して、住民に地域を再認識できる状況をつくりあげていた。それは、「空っぽな現実」だけれども、作品に参加することにより「自分事の問題」に変わっていくプロセスがあり、それが作品が終わっても、洋裁学校が場所として持続、運営していく結果となったように思う。

「建築」においても、住民参加型ワークショップなど、住民を巻き込んでつくりあげる状況がある。その際、どのような合意形成の仕方、参加の仕方があるのかを考える必要がある。今回のレクチャーは、そのような今後の「建築」において、非常に参考になる事例であろうと考える。

■今後の予定

10月30日（水）

vol.04 / 小川博央（建築家／小川博央建築都市設計事務所）

11月27日（水）

vol.05 / 今村雅樹（日本大学理工学部建築学科）+ 小泉雅生（建築家）+ 高橋晶子（建築家）

12月18日（水）

vol.06 / 辻琢磨（建築家／403architecture [dajiba]）

1月29日（水）

vol.07 / 竹中司+岡部文（建築家／AnS Studio）

2月（予定）

vol.08 / 末光弘和（建築家／SUEP.）

3月26日（水）

vol.09 / 星野諭（プレイワーカー・地域コーディネーター／コドモ・ワカモノまちing）

* 毎回 19 時スタート。場所は、駿河台キャンパス 5 号館 5 階スライド室 1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は 1,000 円（当日に入会すれば無料）。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。

■受賞

・田嶋和樹助教が「2013 年日本コンクリート工学会賞（奨励賞）」を受賞した。受賞論文は「鉄筋コンクリート構造物の地震損傷評価体系の構築に関する基礎的研究（総合題目）」であり、2011 年 1 月から 2012 年 12 月までの間に掲載された 3 編の論文がコンクリート工学の向上に貢献する優秀な論文として認められた。

・7 月に行なわれた「新瀬戸内市立図書館プロポーザル」で「今村雅樹アーキテクツ+今村研究室」の案が最終 5 案に選ばれ、公開審査で住民達を前にプレゼンテーションを行った。ランドスケープは山崎誠子短大准教授が協力した。

・「第 9 回ダイワハウスコンペティション」にて、今村研究室ゼミ生 3 年生の清水亮輔くん、敦賀谷俊くんが佳作を受賞した。コンペの表彰式が、11 月 13 日に行われる。

■論文掲載

・廣石秀造助手、岡田章教授、宮里直也准教授、宮城島丈司さん（2009 年修了、桂設計）、斎藤公男名誉教授連名の原著論文「靱性型木造面格子壁を用いた耐震シェルターの基本構造特性の把握」が日本建築学会 構造系 論文集、第 78 巻 第 689 号（2013.7）に掲載された。

■イベント報告

・6 月 15 日、16 日に静岡県の清水総合運動場体育館で行われた「第 29 回全国削ろう会清水大会」で、「世田谷ゆかりの大工道具展示 野村貞夫を中心に」のブースの展示及びパンフレットの作成を佐藤光彦研究室が担当した。展示物は、世田谷区が所蔵する故・野村貞夫の大工道具で、平成 22 年に建築史研究室で調査を行ったうちの一部（53 点）である。来場者数は 527 名であった。

■書籍出版

・岡田章教授、廣石秀造助手が執筆した『絵でみる ちからとかたち』（日本建築学会、丸善出版）が刊行された。建物にはどんな力がかかっているのか？力の種類とは？強くてかたくて美しい建物をできるだけ少ない材料でつくるにはどうすればいいのか？建築構造のしくみについて、絵や写真を通じてわかりやすく解説する 1 冊となっている。本年度の初等構造力学の教科書として使用されている。

・今村雅樹教授と小泉雅生（首都大教授）、高橋晶子（武蔵野大学教授）による『パブリック空間の本』（彰国社）が刊行された。「公共って何だろう？」を解り易く「歴史から計画・設計の手法」までを解説。（関連記事：P14 - 17）

毎号、一枚の建築写真！

A Photo of World Architecture vol.06

New National Stadium JAPAN



© zaha hadid architects

「新国立競技場」の設計者が国際コンペティションによって建築家のザハ・ハディドさんに決定したのが、2012年11月。そして、先日、2013年9月に2020年の東京オリンピック開催が決定。そこから「新国立競技場」そのもの、また選ばれたザハ案に対するさまざまな批判が、降って沸いたかのようにメディアを賑わせています。

そもそもこんな施設などいらないという意見から、最初のコンペの応募資格やそこに指し示されていた施設概要の不備を非難するもの、巨大なザハの案に問題があるとするものまで、その内容はさまざまです。建築家の横文彦さんは、計画の大幅な見直しを求める論文を発表し、先に開催されたシンポジウムには長蛇の列ができるほど熱気に包まれ、その内容は各種メディアに取り上げられました。批判的な内容がある一方、

スポーツ関係者たちは、これぐらい立派なスタジアムが日本にも必要なんだと訴えていたりもします。

景観、街並み、歴史、環境、デザイン、オリンピックの意義、予算、事業性、競技場を使う市民たち……。さまざまな切り口から、今後も議論されていくことでしょう。ザハさんにとっては、「何なんだ日本は!？」といった気分でしょうが、そもそも日本には、都市や建物というものを、市民やメディアと共に議論する機会が、これまでにあまりにもなかったのかもしれない。ザハさんには申し訳ないけれど、「建物は、誰のものなのか?」「これからの東京に、どんな競技場が必要なのか?」今だからこそ、改めて、隣の友だちと、学校の先生と、議論を交わしてみませんか? 2020年、その時、東京・外苑は、どんな会場で、どんな熱気に包まれるているのでしょうか?

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

本を読む

04 大学の先生が建築一年生にオススメしたい本 10

07 大学の先生が大学院生にオススメしたい本 11

10 大学の先生がオススメしたい建築以外本 10

14 [LAB THE WORLD]

研究室を巡るインタビューシリーズ不定期連載

コミュニティやパブリックから設計を学ぶ設計意匠研究室

(インタビュー：今村雅樹教授)

18 [REPORT]

理工建築 | 2013 年度デザインワークショップレポート

短大建築・生活デザイン学科 | 2013 年度サマーセッションレポート

20 [NEWS & TOPICS]

在学生も卒業生も参加できるレクチャーシリーズ

「オウケンカフェ」がはじまりました！

他

22 [A PHOTO OF WORLD ARCHITECTURE]

vol.06 New National Stadium JAPAN

24 [EVENT REVIEW]

mosaki のイベント巡礼 vol.6

「解体の作法」展 - 衰退する社会の住宅のあり方 -

SHUNKEN

2013 Oct. Vol.41 No.3

「駿建」

発行日：2013 年 10 月 31 日

発行人：岡田章

編集委員：佐藤慎也・橋本修・田嶋和樹・長岡篤・古澤大輔・中田弾・田所辰之助・高田康史

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.6

「解体の作法」展

-衰退する社会の住宅のあり方-

2013年10月10日(木)～22日(火) 会期終了

住まいの終わらせ方を考える

◆ 東京大学の学生3人チームによる企画展。東京ガスが主催した「第26回建築環境デザインコンペティション」で優秀賞を受賞した作品をもとに、展覧会に発展したものなんだ。ちなみにコンペの課題は「地球環境に住む建築作法」というものだった。

♥ 簡単に言えば、朽ちた家を一瞬ではなく、朽ちる前にゆっくり段階的に解体しようという提案だよ。建ってから3年後、6年後、9年後というふうに、こまめに、かつ計画的に手を入れていく。「解体の作法」では、「短く見込む」「住みながら解体する」「過激な「膜」に

住む」「住まいを開く」「世代を混ぜる」「住まいを分ける」「住まいを増やす」という考え方の基本7項目が挙げられていたね。

◆ 7つの考え方をもとに具体的な敷地に落とし込んだ3つのケーススタディ「木造密集地モデル」「郊外モデル」「限界集落モデル」では、将来への課題がそれぞれに異なる各地域の特性において、「解体の作法」が、どのような解体へのシナリオを描くのか、よくわかるようになっていた。

♥ これまでの家って、いくら家族の生活に変化があっても、基本的にワンパターンのままでいて、いつか取り壊される、その瞬間を待っていたよね。だけど本当は、人間と同じで、建ったときから解体への道がはじまっている。その道のりを前向きに、現実的に考えようという革命的な提案だよ。

◆ うんうん。社会が縮退する未来を余儀なくする現代にとって、求められている考え方だと思う。家に限らず、オフィスビルとか、公

共施設、インフラ、ひいては都市全体でも、私たちをとりまくほとんどの人工的環境は、解体やシュリンクといった縮退社会の見込みなく生まれてきて、なんとなく現代に続いている。今、どう畳むとか、どう修復するとか、総じて「解体の作法」の視点から、見直す必要に迫られているよね。

♥ 人間にとって、どう生きるかということとは、どう死ぬかということだと思うんだ。その考え方を、自分たちが置かれている建築的な環境についても、フィットさせていけるといいよね。

◆ 展覧会自体も、すごく面白かった！東大の教授をはじめ11人もの専門家に「解体の作法」を見て思った疑問をぶつけたインタビュー集も興味深かった。

♥ そうそう、「解体の作法」という案の良さもあるんだろうけど、展覧会にしたときの企画もまた、良かったんだろうね。学生であっても、こうして見応えのある展覧会を行い、発信することができる。本当にすばらしいことだよ。

文責：♥ 田中元子 / ◆ 大西正紀



展覧会は、リビングデザインセンターOZONE 7Fにて15日間に渡って行われ、評論家の三浦展氏や建築家の西沢大良氏をゲストに迎えた連続シンポジウムも学生たちの企画により行われた。(photo=芦澤健介)

Recommend | 2013年11-1月

【1】「吉岡徳仁 - クリスタライズ」 | 東京都現代美術館 |

会期：2013年10月3日～2014年1月19日

アーティスト吉岡徳仁の国内最大規模の個展。デザインやアート、そして建築や空間に至るまで自由で実験的な作品たちは、世界中で評価されている。今回は2007年にスタートした「Crystallized project」を中心に、自然結晶の椅子「VENUS - Natural Crystal chair」や、結晶の成長過程において「曲を聴かせる」ことで音の振動を与え、つくり上げた結晶絵画「Swan Lake」、薔薇を結晶化させた「Rose」などを展示する。

【2】「ARCHITECTURE FOR DOGS 犬のための建築展」 | TOTO ギャラリー・間 |

会期：2013年10月25日(金)～12月21日(土)

犬にとっての建築には、どんな可能性があるだろうか？ この企画は犬の尺度で建築を捕らえなおすプロジェクト。デザイナー・原研哉のディレクションのもとに集結したのは、アトリエ・ワン、伊東豊雄、MVRDV、妹島和世、トラフ建築設計事務所、藤本壮介など、国内外の建築家たち13作品。犬小屋にもきっと建築家の考え方がしっかりと通底しているはず！

【3】「元倉真琴退任記念「都市への愛・キャンパスへの愛」展」 | 東京藝術大学大学美術館 陳列館 |

会期：2013年11月14日(木)～11月26日(火)

建築家で東京藝術大学建築科の元倉真琴の退官に合わせた記念展覧会。元倉氏による伝説の都市サーベイや自身の作品だけではなく、歴代の研究室卒業生たちも出展する。こんな機会に他大の空気を体感してみよう。

【編集後記】

今回は、大学の先生たちにアンケートを取る形でお勧めの本をうかがい、特集をまとめました。それぞれの人生の中で、ある「本」との出会いが、その後に大きな影響を与えたというエピソードも少なくありませんでした。世界は、私たちの一生では把握しきれないほどの面白いことで包まれています。そして、「本」というメディアは、自分自身で取捨選択しながら、それらの一端をいとも簡単に疑似体験できる最良のツールなのかもしれません。今、建築を学んでいる皆さんは、将来は建築にまつわるさまざまな仕事につくことでしょう。その多様さが、年々広がり続けているからこそ、建築を軸に、さまざまな物事を知り、触れることが求められるのだと思います。そんなときに「本」との出会いが、きっと大きなものになるに違いありません。

(大西正紀 + 田中元子 / mosaki)